資料組織法の現在

渡邊隆弘（帝塚山学院大学）

０．はじめに

●司書の専門性と資料組織化

「資料と人を結ぶ」専門性のコアの一つ

目録作成の変容（標準化、ネットワーク化、アウトソーシング）

→ 「日常の作業」から離れて、必要な知識は何か？

●目録と目録規則の動向

目録そのもの（OPAC）、目録作業、目録ツール（目録規則）

１．インターネット時代の図書館目録

根本彰氏「図書館を支援するための技術であった情報技術が、図書館に置き換わって主役になるような状況が現実のものになっている」[1]

倉橋英逸氏「これらの[書誌コントロール]活動による図書の書誌記述の世界的な標準化は、1990 年代に普及したインターネットのWorld Wide Webの時代に、世界中の図書館OPACの標準書誌データを検索できるようになり、その真価を発揮した。しかし、図書館の書誌コントロールの絶頂期は同時に次の時代への幕開けでもあった。」[2]

●「目録の危機」論議[3]

・2005 年ごろから、米国の研究図書館界を中心に

・目録の相対的な地位低下：利用の減少とカバー率の減少

インターネット、検索エンジン… “one of them”に

・進歩のない OPAC

・作成・維持のコスト： 基本的に人力のデータ作成

・大規模デジタル化プロジェクト

Google Book Search など

・生き残りのためには？

機能強化、利用開拓、他のシステムとの融合、効率化…

---

[1] 根本彰「デジタル情報空間における書誌コントロール論の位相」『情報の科学と技術』57(5), 2007.5. p.220-225

[2] 倉橋英逸「米国議会図書館における書誌コントロールの環境変化と再構築の道程」『整理技術研究グループ 50 周年記念論集』2007.9 刊行予定

[3] 渡邊隆弘「研究図書館目録の危機と将来像」『カレントアウェアネス』290, 2006.12 <http://www.dap.ndl.go.jp/ca/modules/ca/item.php?itemid=1053>

● **新しいOPACへの模索**[4]

Yu & Young「過去 25 年以上にわたるOPACに関する多くの研究・論文にもかかわらず、図書館目録の検索における利用者の成功を改善するオリジナルなアイデアの多くはいまだ実装されていない。皮肉なことに、これらの技術の多くは現在Web検索エンジンに見いだせる。」[5]

・Google に学ぼう

「フィットの度合い」順に表示（「レレバンスランキング」）

入力間違いに対処（スペルチェック）

・図書館の伝統資産を再生しよう

件名標目などの新たな利用（「ファセットクラスタリング」）

「著作」による集中（「FRBR 化」）

・Amazon.com や YouTube などにも学ぼう

表紙画像や内容紹介の利用

利用情報の再利用

この本を借りた人はこんな本も…

あなたにはこれもお勧め…

利用者が参加できる目録

コメント、レビュー

分類（カテゴリー）やキーワード（タグ付け）

●日本の公共図書館 OPAC は

→　「OPAC 評価の実際」

２．目録規則の現在

●目録規則をめぐる諸状況

・目録対象資料の変化（＝電子化、ネットワーク化）

・資料組織化環境の変化（＝電子化、ネットワーク化）

●目録規則の動向

・1990 年代後半以降の活発な改訂が一段落

ISBD（国際標準書誌記述）、AACR2（英米目録規則）、NCR が順次改訂

---

[4] 例えば、次のようなもの。興味のある方は、実際に動かしてみてください。

NCSU New Catalog　http://www.lib.ncsu.edu/catalog/

ノースカロライナ州立大。レレバンスランキングやファセットクラスタリングなど

AquaBrowser Library　http://www.medialab.nl/

Metalib 社（オランダ）の開発したシステム。情報の視覚化など

OCLC WorldCat.org　http://www.worldcat.org/

総合目録。様々に新たな機能が加わり、進化している。

[5] Holly Yu & Margo Young. “The Impact of Web Search Engines on Subject Searching in OPAC” *Information Technology and Libraries*, 23(4), Dec., 2004.　pp. 168-180

改訂は、主に特定の章[6]

「電子資料」：　旧「コンピュータファイル」

リモートアクセス資料への対応など

「継続資料」：　旧「逐次刊行物」

適用範囲の拡張など

●『日本目録規則 1987 年版改訂 3 版』（NCR87R3）

・2006 年刊行（実質改訂は 2005 年）

・第 13 章「継続資料」（旧「逐次刊行物」）

逐次刊行物 ＋ 更新資料（WWW ページ、加除式資料など） ＝ 継続資料

タイトル変遷の規定を見直し（「重要な変化」と「軽微な変化」）

・第 2 章「図書」、第 3 章「書写資料」

和古書・漢籍に関する規定

はじめての本格的な標準化（従来は各機関がそれぞれの伝統的手法で目録作成）

３．新しい目録規則への模索

●求められる目録規則

・改訂されてきたが十分ではない

カード目録時代の枠組み　→　章ごとの改訂では限界

・OPAC に対応した規則に

「記述」だけでなく、「標目」も抜本的に

・媒体の多様化、複合化に対応した規則に

「資料種別」による章立てに限界

・「コンテンツ」と「キャリア」（内容的側面と物理的側面）の問題

伝統的媒体では結びつきが強く、見過ごされてきたが…

多媒体で発行される資料（電子化で顕著に）

「版」とはなにか（内容が変わる、物理媒体が変わる…）

・図書館外の世界との「相互利用性」

孤立していては、使ってもらえない

●FRBR（書誌レコードの機能要件）[7]

・今後の目録規則の基礎になる枠組み

・Functional Requirement for Bibliographic Record (IFLA 1997)

書誌レコードの構造分析・・・「実体関連モデル（E-R モデル）」

・目録利用の「ユーザタスク」（利用者指向の分析）

「発見」「同定」「選択」「入手」

---

[6] 以下の図書が背景や問題点を知るのによい。ただし、いずれもNCR改訂案段階での検討会記録であり、NCRの条項細部は最終版と異なっているので注意。

日本図書館協会目録委員会編『電子資料の組織化』日本図書館協会, 2000

日本図書館協会目録委員会編『継続資料と和古書・漢籍の組織化』日本図書館協会, 2005

[7] 和中幹雄ほか訳『書誌レコードの機能要件』日本図書館協会, 2004.3. 121p

書誌レコードの各項目（「属性」）は何のためにあるのか？

・資料を４段階の枠組み（抽象→具体）で把握

「著作（Work）」・・・・・・・・知的・芸術的創造物の単位

「表現形（Expression）」・・・ 文字、音声等で表現された単位

「体現形（Manifestation）」・・キャリアが確定し、具体物となった単位

「個別資料（Item）」・・・・・個別の一点一点

→ 特に、「表現形」の設定が新しい

●AACR（英米目録規則）の全面改訂

・2002　AACR2 2002 rev.刊行（ルーズリーフ式）

・その直後から、「AACR3」改訂の活動

以後、紆余曲折（何度か草案も公開されたが、議論が沸騰して遅れ気味）

現時点のタイトル：　RDA: Resource Description and Access

*「目録」の語が含まれない

2009 年刊行予定（当初は 2006 の予定。どんどん遅れている）

・目標

「デジタル世界のためにデザインされた、資源記述とアクセスの新しい標準」

あらゆる種類のリソースに対応、図書館外のコミュニティでも使用可能

データを格納・操作するシステム等から独立し、幅広い相互運用性

・特徴（現時点で明らかな範囲で－最終的に変更可能性あり）

FRBR を強く意識して取り入れ

書誌レコード作成の基本は「体現形」（「表現形」を基礎とすることも検討したが、採用せず）

「資料区分」（図書、地図…など）による章立てを撤廃し、データ要素別の章節立て

例えば、「責任表示」として、すべての資料種別に関するルールを列挙

「資料区分」を二本立てに（内容の側面と、物理的な側面）

コンテンツの区分・・・text, image, music notation など

メディア（媒体）の区分・・・audio, digital, microform, unmediated など

各データ要素に「何を記録するか」に特化（記述文法は扱わない）

「プレゼンテーション」の仕方は規則の範囲としない

（ISBD 区切り記号法も言及しない）

「意味」と「構文」の分離：　現在のメタデータの考え方の主流

著者基本記入制は、基本的に維持（Primary Access Point と呼ぶ）の方向

典拠コントロール、典拠レコードを明確に位置づけ

●NCR２ＯXX 年版

・？？？

４．おわりに

・しばらくは激変の時代

・細則よりも、基本的考え方の理解を

OPAC 評価の実際（導入編）

渡邊隆弘（帝塚山学院大学）

＊「資料組織法の現在」とは異なり、現在の公共図書館の状況に即したレベルで考えてみます。

＜レポート課題＞

WebOPAC の評価と改善提案

勤務館もしくは適当な館の OPAC について、検索機能・表示機能・ヘルプ機能等の評価を行い、改善点を考えてください。

全体的でも、特定の問題を突っ込んで論じていただいても可

近隣図書館・同規模図書館・都道府県立図書館・NDL-OPAC 等のシステムも参考にし、相対的に論じていただけるとなお可

話が細かくなっても、現実的な問題を考えるのが常道かと思います（例年の提出分を拝見しても）。一方で、現状ではどうしようもなさそうな「夢」を語ってもらってもかまいません。ただその際は、何がどうなっていればできるのか、をできる限り考えてみてください。

Web 版 OPAC のない図書館の方は適当な館を素材としてください。また、特別な問題意識があれば、あえて勤務館以外を対象としていただいても可。

● OPAC 世代論

C.R.Hildreth (1984)[1]　1980 年代米国での展望

第一世代（当時でも古い OPAC）

単純で限定された検索

タイトル、著者、標準番号など、完全形を原則

簡略書誌レコードの単一表示フォーマット

→ カード目録の模式という色彩）

第二世代（当時の OPAC の主流）

やや柔軟性のある検索

キーワードアクセス、ブール演算、部分一致検索

インデックスや標目のブラウジング

利用者に応じた対話モード（初心者向け、エクスパート向け…）

完全書誌レコードの表示、多種の表示フォーマット、結果のソート

わかりやすいエラーメッセージ、位置に応じたヘルプ機能

---

[1] Charles R. Hildreth “Pursuing the ideal: generations of online catalog”. *Online catalogs/reference converging trends. Chicago*, ALA, 1984. p.31-56
注 2 の論文などに日本語で紹介されている。

第三世代

典拠によるアクセス、フリーテキストと統制語検索の統合
日常語による探索表現
個別的な注文に応じた表示
内容に応じた自動エラー訂正、ヘルプ表示
提供データの拡張（抄録／索引、多数・多種のデータベースとの連結）

●OPAC 評価指標の例（別紙で配布）

牧村・竹内（1994）[2]　　大学図書館を想定
Babu & O'Brien(2000)[3]　　WebOPACの評価

＊あくまで参考。これに合わせて全般的にレポートを書けとは申しません。
むしろ自分なりの視点で問題を追求いただいたほうが実り多いかと思います。

●さまざまな評価の視点（例）

・検索の目的と望まれる機能

既知資料検索
　ふつうはタイトル・著者から
　一見単純だが、問題も多い　→ 上田ほか（1999）[4]
　書誌情報からの索引語切り出しの問題
主題検索
　分類・件名データの生かしかた
　その他の項目検索との併用

・キーワード検索とブラウジング機能

ブラウジング機能の必要性
　情報要求はいつも明瞭なわけではない
　WWW の「ハイパーリンク」を生かす？

・索引語の生成と検索語の入力（どのようなキーワードで検索できるか？）

OPAC 時代に入り、標準化の喪失とブラックボックス化
検索対象項目（書誌情報の、どのデータ要素から検索できるか）
索引語切り出し（どういう形でインデックスを作るか）
　完全形か部分（単語など）に分けるか（最近は「全文検索」も）
　分かち書きの問題
　正規化の問題（文字種や特殊文字の扱いなど）

---

[2] 牧村正史、竹内比呂也「大学図書館における目録の評価について－OPACの機能を中心として」『大学図書館研究』43, 1994.3. p.1-11
[3] B. Ramesh Babu, Ann O'Brien "Web OPAC interfaces: an overview" *The Electronic library*, 18(5), 2000. p.316-327
[4] 上田修一ほか「WWW上のOPACにおける既知事項検索の諸問題」『Library and information science』41, 1999. p.1-15

検索語入力（どういう形の入力に対応できるか）
正規化の問題など（索引語切り出しとの対応）
資料種別（図書、雑誌…）と検索機能

・検索機能と検索画面のインターフェース

論理演算（ブール演算）機能
その他の検索オプション（部分一致、同義語検索など）
利用者レベルに応じた検索画面
ヒットしない時、多すぎる時の対応

・表示機能と表示画面のインターフェース

検索結果の並び替え（ソート）機能
書誌情報、所蔵情報の表示方法
表示対象項目（簡略、詳細）
資料種別ごとの対応（図書、雑誌…）

・ヘルプ機能、ガイド機能

わかりやすい表現の問題
検索者の意図を的確によみとったヘルプ？

・インターフェースに関するその他の問題

児童向け、高齢者向け、など

・図書館サービスとの連結

所在情報のきめ細かな表示（書架へのスムーズなアクセス）
貸出予約、貸出状況確認など（パーソナルなサービス）
複数館からなる図書館システムへの対応

・書誌データそのものの問題

データの精度、品質維持
典拠コントロール
データの収録率（遡及入力率、資料種別ごと）
データの更新頻度
特殊な資料への対応（地域資料など）

・図書館目録の拡張

より詳細な情報提供（目次、概要、表紙画像など）
外部データベースとの連動
他機関との横断検索

・その他高度な機能

●次回計画

４名くらいの方に発表いただく予定